

2023年4月分総評 杉本真維子

「公安の監視下にあるほたるいか」松下誠一(東京都)

「ほたるいか」がなんともアナーキーです。「公安」「監視」などの言葉がまとう権力を瞬時に骨抜きにしています。

「脱法のトランポリンと聞いている」松下誠一(東京都)

こちらも上と同様の手法と思いますが、伝聞によって語り手以外の誰かを巻き込んでいて、そのトボケぶりが輪をかけて面白いです。

「沈黙の並ぶどこかで狂犬が／吠え続けている地下駐車場」大嶋碧月(兵庫県)

「並ぶ」「地下駐車場」などの整然としたイメージがうつつわ(型)をつくりだしています。そこから吹き零れる狂犬の吠声が鮮烈です。

「傷つける言葉の通りに傷つけて／雨のぬるさに今、驚いた」大嶋碧月(兵庫県)

混迷から覚醒へ。認識を打ち破る「雨のぬるさ」を大変鮮やかに捉えています。

「死んでいる虫を拾う／私の方がよっぽど／死んでいるのに」秦大地(東京都)

このように思いながらも拾う。そのときのかがめた姿勢や素朴な指が一瞬よぎって、語りがたい感情を伝えてきます。

「地図に落とすたびに唸ってくる獣」合川秋穂(東京都)

どんな獣でしょう。存在するのに見えないことこそが獣の本質かもしれません。

「あきらめた陽射しの中で転がった／鈴はどこかで風になります。」im(沖縄県)

諦念からのねじれるような変調が美しいですね。「風は鳩を受胎する」(大岡信「地名論」)をふと思い出しました。

「十八で／お前を殺して俺も死ぬ／愛の終わりに電車のブレーキ」加藤万結子(愛知県)

この作品を連作の一つと見たときにしかいえないことですが、もしも子を送り出す母の気持ちとするなら、一人称を「私」でなく「俺」としているところに切実な「ブレーキ」を感じました。

「花冷のとなりの見える小便器」にしざわゆうと(福井県)

視覚に入り込む小便器の白さが花冷を際立たせています。「の」の助詞のどこかあやういつなぎ方が独特の世界を生んでいます。

「桜の花びらが散り／蕊の膿脂が覗き始める／白髪交じりの／髪を梳かす」山本欠伸(兵庫県)

三行目の小さなジャンプが印象的です。着実に年齢を重ねることと言葉の動きがかみあっていると感じます。

「1時間休みを使い来た花屋／流れる日々に読点を打つ」貴田雄介(熊本県)

人と花によって彩られる読点の素晴らしさ。光とはこのように「日々」に射し込むものなのだと思います。

した。

「星団か或いは墓場のようにいて／時に深夜の風呂は優しい」マズルカ(山口県)

「深夜の風呂」にはたしかにどこか原始的な心の手触りがあります。ひたひたと深い洞窟を降りていくようでもあります。

「ピアノピアノ／黒いピアノに春が来る」有野水都(東京都)

「ピアノピアノ」という連呼が効いています。春を迎え、浮き立つ気持ちが、黒いピアノをも明るく染め上げるようです。

今回も力作が集まりました。新しい投稿者も続々と現れています。次回も楽しみにお待ちしています。